

(8) 家庭科

- 指導計画を作成する場合、まず、2学年で取り扱う内容について、その系統性、発展性を考慮して、同内容として取り扱ってよいものなどを検討する。

(9) 体育科

- 運動に関する指導では、地域や学校、児童の発達段階を考慮し、児童自らが運動の課題解決を目指せるよう、合同学習等の形態や単元配当時数、配列及び内容などを弾力的に工夫し、領域として調和のとれた指導計画を作成する。

### 第3節 学習指導方法の工夫・改善

各学校において、学習指導要領が目指す教育の実現を図るため、児童一人一人のよさや可能性を生かすことを根底に据え、児童が自ら考え、主体的に判断し、表現したり、行動したりすることができる資質や能力を身に付けることを重視して、学習指導を構想し展開することが求められている。

複式指導においては、児童一人一人にきめ細かな指導が可能であるという少人数の特性を生かした魅力ある授業づくりを進めることを重視するとともに、思考力や表現力、社会性などを育成するための学習活動の工夫・改善を行い、児童一人一人のもつよさや可能性を把握し、個に応じた指導の改善を図ることが大切である。

#### 1 創意工夫のある授業の創造

(1) 学校の教育的課題の解明を図る授業の構想

複式指導を進めるに当たっては、学校や児童、家庭、地域社会の実態を明確に把握することが大切である。その上で、それぞれが抱える課題の解明を図る視点から指導目標や指導内容を重点化し、指導計画及び指導方法の改善に努めるようにする。

(2) 各教科等の特質やねらいに即した指導内容の重点化と具体的な指導計画の作成

2つの学年が同時に学習を進める複式の指導においては、学習活動の場や内容、あるいは教師の直接指導が限られていることなどから、各教科等の内容の重点化や教材の精選に努めるとともに、上・下両学年の指導の系統性、発展性及び児童の能力・適性を考慮し、児童がゆとりをもって充実した学習ができるように、学年別指導や同単元指導などの計画を作成する。また、2学年まとめて目標や内容が示されている教科の指導計画作成に当たっては弾力的な取扱いを考慮する。

(3) 課題把握（第1段階）の充実

複式指導では、課題把握の段階を授業の成否を左右する重要な段階と考える。この段階で、しっかりした解決の方向付けを行うことが、間接指導(自力解決)での活動を成立させる。

そのためには、問題提示の後、まず結果(答え)の予想をしたり、解決の方法や手立てを考えたりさせる。このような見通しの段階を充実させることが大切である。そして、児童に本時のめあてを設定させ、学習課題の焦点化を図る。

ただし、第1段階以後の学習時間を確保するために、教師は発問を精選し、できるだけ短時間に課題把握の段階を終えるよう留意することが大切である。

#### (4) 間接指導の充実

授業のほぼ半分を占める間接指導を児童の思考や認識の過程に即して、いかに効果的なものにしていくかが複式指導の大きな課題である。

したがって、間接指導を児童自らの課題を追究させる場、発展させる場、協力して学習を深めさせる場、個人の能力に応じて補充・深化の学習を行う場にするなど、児童一人一人の個性や能力に応じて主体的に学習できる場として組織するとともに、直接指導との有機的関連を図り、間接指導での学習が直接指導の中で十分に生かされるよう指導過程を工夫する。

このためには、ガイド学習等を導入することが必要である。ガイド学習を行う際、ガイド役の児童が、教師の指導のもとに立てた学習進行計画によってリードできるよう、学習方法の指導が重要となる。また、時間を意識させて活動させる必要があり、タイマーの活用は効果的である。時間を意識させることによって、児童の活動が機敏になり、次の教師の「わたり」までに確実に作業を進めることができ、どちらかの学年に指導が偏ってしまうことも防ぐことができる。

#### (5) 少人数の特性を生かした指導過程や指導形態の工夫

複式指導では、少人数であるため、一人一人の実態に即した指導内容や指導過程によって授業を進めることが可能である。いくつかの課題やコースを児童が選択したり、学習の順序や組合せの選択、自分自身の学習課題を設定させたりするなど、興味・関心、経験などに応じて主体的に学習を進めることができるような指導過程や指導形態を工夫することが大切である。

#### (6) 少人数の特性を生かした学習指導の留意点

学習効果をより一層高める上で、次のことに留意して指導の展開を図ることが大切である。

- ① 一人一人の発言や直接体験の機会を多く設定し、意欲的な学習活動ができるようにする。
- ② コンピュータや情報通信ネットワーク等の積極的な活用を通して学習の多様化、思考力や表現力、コミュニケーション能力の育成を図る。
- ③ 自発的な学習活動を高める手立てや基本的な学習習慣の育成を大切にする。
  - 自分なりの考えをもち、発表、反論、討論できる能力の育成
  - 自分の考えを分かりやすく、素直に表現できる能力の育成
  - 既習内容を応用・発展できる能力の育成
- ④ 学習活動における情意面の高まりの手だてを大切にする。
  - 学習への興味・関心、意欲の育成
  - 自信、自立心の育成
  - 達成感、成就感の感得

#### (7) 少人数の特性を生かした評価の工夫

少人数の学級においては、一人一人に接する時間が多く、個々の実態把握が容易である。したがって、学習の目標や内容に応じて、個別の学習過程における評価の位置付けやその方法を工夫するとともに、自己評価や相互評価を取り入れながら、一人一人の実態を把握し、指導の改善を図ることが大切である。

また、学習の各段階で形成的評価も行いながら、実態に応じてフィードバックを行い、確実に基礎・基本を身に付けさせていくことも大切である。

## (8) 集団で学ぶ学習方法を身に付けさせる手だての工夫

### ① ガイド役の児童の指導

全ての児童がリーダーとしての可能性を秘めた存在であることを考慮し、全ての児童にガイド役としてのリーダーを経験させることが大切である。その際、作成したガイド学習の手引きをもとに進めさせたり、ガイド役の児童に対する賞賛をしたりといった適切な支援も大切である。

### ② 自信の高揚

児童一人一人の実態を確実に把握し、個に応じた課題の与え方や自力解決の場における支援・評価を工夫しながら、「自分にもできるんだ」という自信をもたせる。

### ③ 表現する力の育成

人前で臆せず表現できるようにするために、朝の会や帰りの会でスピーチを取り入れたり、自分の思いを日記に書く習慣を付けさせたりする。

### ④ 集団での活動の機会と場の設定

- 全校集会等の在り方を工夫し、児童の出番を多く設定する。
- 給食はランチルームで全校会食させたり、清掃は縦割りのグループ編成を工夫したりする。
- 教科によっては、可能な限り合同学習を実施する。
- 多様な考え方や社会性を育成する集合学習や交流学習を積極的に推進する。
- 地域での行事へ積極的に参加させる。

## 2 個に応じた指導

学習の主体はあくまで個人であるといえる。しかし、個は一人で育つものでなく他との関係において育つものである。複式学級における学年差を個人差ととらえると、異学年にわたる能力差は個人差の大きい学級であると考えられ、指導の上で個に応じた指導の工夫、改善が特に必要となる。複式学級の指導においては、教材研究や資料の準備・整備等、教師の負担はかなり大きなものがある。しかし、他方、少人数であるが故に、児童一人一人の実態把握が容易であり、一人一人の活動量も多く確保され、個に対応しやすいといった複式少人数指導のよさも見られる。この少人数の特性を生かすことにより、個に応じた指導の工夫を図り、児童一人一人が意欲をもち、自主的に学習を進めていくための能力や態度の育成を図ることが重要である。

### (1) 学習指導計画への配慮

- ① 児童の実態を的確に把握するため、その観点を明確にする。
- ② 把握した実態から、一人一人に応じた到達目標を設定する。
- ③ 一人一人に合った具体的な支援の在り方を考え、指導過程の中にその具体策を明確に記述する。
- ④ 一人一人の目標に即して評価し、称賛する。その努力の過程を認めるように努める。
- ⑤ 児童の興味・関心や諸能力に応じた教材の開発に努める。
- ⑥ 児童の学習の達成度に応じて、弾力的な進め方や発展的な学習ができるよう考慮する。
- ⑦ 一人一人の個性が発揮できるような雰囲気づくりをする。

### (2) 指導の中での個別化への配慮

- ① 「ずらし」によって、直接指導、間接指導の時間が基本的には位置付けてあるが、個に応じて、適切な対応が必要である。

- ② 間接指導の時間において活動が停滞している児童への支援として、個に応じたヒントカードやワークシートの準備も必要である。
- ③ 間接指導の時間では、活動の深まりが見られない児童もいるので、児童同士の助け合い、教え合い学習を取り入れることが大事である。例えば、ガイド学習等ができるようにガイド役の児童の指導や基本的な学習習慣の育成を図り、児童同士の中でヒントをもらったり、それぞれの考えに対する意見の交換（相互評価）をしたりして、活動が促されるのも個に応じた支援の一つと考えられる。
- ④ 個に応じた発問や説明の工夫、精選をすることが、単式学級を指導すること以上に求められる。直接指導の時間は限られるので、いかに短時間で要領よく、課題をつかませ、解決の方向性をつかませるかが重要である。
- ⑤ 個に応じた練習問題の工夫を行う必要がある。例えば、コース別学習や習熟度別学習は、少人数ゆえに取り組みやすいと考えられる。
- ⑥ 間接指導の時間に、コンピュータの活用によって、より効果的な学習が期待できる。ただ、児童のどのような能力を高めるためにコンピュータを活用するのか、その目的を明確にした上で活用することが大切である。

### 3 発問や板書の工夫

授業は、教材を媒体として、教師と児童の言葉や表情、態度等のコミュニケーションによって進行する。したがって、教師の発問とそれに対する児童の反応は重要な要素となる。また、思考力・判断力・表現力等の向上を図る上から、一人一人の考えを板書することは大切なことである。特に、複式指導では、直接指導の時間が単式指導の2分の1になるので、発問もより一層精選され、集約される必要がある。

#### (1) 発問について

- ① 意欲を高める発問
  - 簡潔、明瞭で要を得たもの
  - 児童の能力の個人差、興味・関心の度合いにあったもの
  - 授業のねらいに基づき、計画的なもの
  - 児童の学習状況に即応するもの
  - 一問多答になりやすいもの
  - タイミングのよいもの
  - 相互につながりのあるもの
  - 児童の思考力や想像力を触発するもの
- ② 思考力・判断力を高める発問
  - 価値判断を求めるもの
  - 意見、解釈を求めるもの
  - 原因、結果の関係を掘り下げるもの
  - 説明、例証を求めるもの
- ③ 発問に対する配慮事項
  - 児童に考える時間を与える。
  - 児童の考えや意見を大切にし、誤答に対して児童の心を傷つけないようにする。
  - 発問は多発せず、必要最小限にとどめる。
  - 発問に対する答を一部の児童に求めない。

(2) 板書について（黒板の位置及び板書への配慮）

- 複式学級の学年差に応じた指導において、一つの黒板を2つの学年で共有する場合、明確な区切りをつけておく必要がある。
- 場合によっては、移動式黒板などの利用を図る。
- 教室前方の黒板と後方の黒板とを各学年ごとに分けて使用する。
- 児童の視線の高さや採光に留意し、どの児童にもよく見えるようにする。
- 指導目標や学習内容を確実にとらえ指導の順序を研究した上で板書事項を決定する。
- 児童の思考活動を促し、確実に学習内容を習得させるために役立つ工夫をする。
- 板書項目であらかじめ分かっていることは、カードなどに記入しておき、板書する時間を短縮する工夫が必要である。

#### 4 教育機器を活用した学習指導

複式指導においては、一人の教師が2つの学年の児童に対応するため、これまで効率的な授業の展開をめざして様々な方策がとられてきた。一般には、それぞれの学年を単位にして指導を行う直接指導と、一人一人の児童の自主学習に委ねる間接指導とを組み合わせ、教師が「わたり」を工夫した指導形式が多くとられている。しかし、実際の授業では、直接・間接指導の時間配分の上で弾力的な方法がとりにくいことから、次のような問題が指摘されている。

- 間接指導では、計画にこだわりすぎて、児童の考えを引き出すことよりも一方的に教え込む指導になりやすい。
- 間接指導では、単なるドリルや前時までの復習等になりやすい。
- 間接指導では、子どもの活動が停滞しやすい。

間接指導の時間において、コンピュータ等の機器を使うことによって、児童の学習意欲を高めたり、個に応じた授業の展開を工夫したりすることは大切なことである。また、小規模校としての短所と考えられる「多様な考えが出ない、積極性に欠ける、適度な競争心が無い」等をインターネットやテレビ会議システムなどを活用し、他の学校と交流する機会を多く持つことで解消しやすくなったと考えられる。

さらに、教科等における調べ学習においても、情報通信ネットワーク等の活用によって必要な学習情報が取得しやすくなった。

(1) コンピュータを活用した学習指導

① コンピュータ活用の基本的な考え方

- ア 教師の代用ではなく、教師の指導の効率化を図るための教育機器として用いる。
- イ 児童の主体的な活動を可能にする教育機器として用いる。
- ウ 使えばよいのではなく、活用の価値（特性）が明らかな場合のみ用いる。
- エ コンピュータのみではなく、諸メディアの活用により学習の活性化を図る。

② コンピュータ活用の方法

ア 目的別活用法（特性に合った活用法）

- 動く道具としての活用（シミュレーション）
- 自ら調べる道具としての活用（インターネット検索）
- ドリルとしての活用（フリーソフトの取得）
- 情報記録としての活用
- 学習の発展としての活用
- 情報提供、情報収集と意見交換としての活用（テレビ会議システム、電子メール、プレゼンテーション）

## イ 学習段階活用法

### 【課題設定の段階】

- シミュレーションで課題をつかむ。
- 事象の提示をする。
- 問題場面の理解の補助として使う。

### 【解決努力の段階】

- コンピュータの指示に従って、自主的に学習を進める。
- つまづいたとき、ヒントをコンピュータによって提示する。
- 理解を助けるために活用する。
- 問題解決の道具として活用する。

### 【定着の段階】

- 学習を整理するために活用する。

## ウ コンピュータや情報通信ネットワーク等活用の留意点

- 情報リテラシー（情報活用能力）の育成を考慮して、機器の活用を図る。
- 児童生徒のプライバシー保護や著作権の問題を考慮する。学校のガイドライン作りが必要である。
- 有害情報の問題に対処するため、「ひむか教育ネットワーク」を通してのインターネット検索が望ましい。

## エ テレビ会議システムの長所と短所

### 【長所】

- リアルタイムで双方向の交流ができ、密度の高いコミュニケーションができる。
- 子どもの素朴な疑問から調べ学習への深まりが見られる。
- 伝える力をつける上で効果的である。
- 情報収集を行いながら、話し合いを深められるなどこれまでにない手法が取れる。

### 【短所】

- 教科で実施する場合、進度を合わせるのが難しい。
- 相手校との打合せに時間がかかる。
- テレビ機器の操作の習得が必要である。

## オ 情報リテラシーの育成

情報機器の活用には、情報リテラシーの育成に留意することが必要である。

### 【情報リテラシーの定義】

- 情報活用の実践力  
目的に応じて、必要な情報を収集、判断、表現、処理、創造し発信、伝達できる能力のこと。
- 情報の科学的な理解  
情報手段の特性の理解と基礎的な理論を理解すること。
- 情報社会に参画する態度  
情報が社会に及ぼしている影響やモラル、責任についてその重要性を理解すること。

## (2) 動画を活用した学習指導

### ① 動画教材の種類

#### ア テレビ録画教材

テレビ教材（テレビで放送される教育番組）を直接利用するのでなく、それを録画しておき、必要なときに再生して利用する使い方である。

繰り返し再生や静止画像再生など、児童の実態や授業の進度に応じたきめ細かな指導が可能になる。

#### イ 既成動画教材

教材として市販されている動画である。テレビ教材に比べ、かなり多彩な内容や構成のものがある。

#### ウ 自作動画教材

ビデオカメラ等を用い、自分で制作する教材である。比較的手軽に教材や資料を制作できることから、テレビ録画教材や既成録画教材で不足する面を補うだけでなく、独自の教材を開発し教育活動に取り入れることができる。

長所として、次のようなことが考えられる。

- 児童の実態に即して工夫し、制作することができる。
- 地域の素材を生かすことができる。
- 教師や児童の姿を取り込めるため、親近感や興味・関心が生まれ、学習意欲が喚起される。
- 録画（編集）後、すぐ再生できるので、新鮮なものとなる。
- 必要に応じて内容の一部修正や改善をすることができる。
- 制作は比較的簡単であり、誰にでもできる。

### ② 自作動画教材の活用例

#### ア 筆順の学習（国語）

漢字の筆順を覚える学習に使う。教師が漢字を板書する動画を視聴させて、児童に正しい筆順を覚えさせ、それを練習させる。

#### イ 地域の学習（社会）

3、4年生の社会科学習では、実際の見学や体験を取り入れることが重要である。導入の段階や学習問題設定の場面で動画を視聴させることで、興味・関心が高まり、以後の学習がより効率よく進む。

#### ウ 問題の解答と解説

間接指導において、児童が問題に取り組んだ後、その解答と解説を動画によって行う。教師は前もって解答と解説を動画に収録しておく。

#### エ 地域にはない自然の学習（理科）

例えば川や地層の学習等は、地域によっては観察が不可能な場合がある。そういう場合あらかじめ動画に収録しておいたものを視聴させながら説明をしていくと効果的である。

#### オ 器具の名称や操作方法の説明（理科）

間接指導において、例えば顕微鏡の各部の説明や操作方法について動画を使って学習させることができる。

## 5 複式指導における評価

複式学級における評価は、少人数で評価の機会が多く、教育の成果に対する評価が物理的に容易である等教師にとっては実施しやすい面がある。しかし、児童の側に立つと、相互評価の機会が少ない、友達の考えと比べながら自分の考えを練り上げにくいなど、少人数であるための問題点もある。そこで、以下の点に留意しながら、指導の過程や成果について評価し、その後の指導方法の改善や児童の学習意欲の向上のために役立てる必要がある。

### (1) 児童の実態把握

複式指導における児童の実態把握は、少人数のため容易である。しかし、実態を固定的にとらえたり、主観的にとらえやすいという危険性ももっている。そこで、学級担任以外の教師にも評価に参加してもらうなど、分析をできるだけ客観的に行うとともに、次ページの例にもあるような個人記録として累積記録をとり、現在の状況を正しく把握することに努める必要がある。

(例) 表現力に関する個人記録 作文調査票 3年 氏名( )

ア 内容面の実態調査 平成 ○年 ○月実施 題名「ともだち」			
① 取材能力	② 主題の統一度	③ 構 想 力	④ 文章構成力
・友だちの好きな物得意なこと、性格	・二人の友達のことを簡単に紹介し、自分が好きであることを素直に書いている。	・はじめ、中、終わりがはっきりしている。	・内容に応じて、きちんと改行できる。
⑤ 記述力	<ul style="list-style-type: none"> <li>・簡単に短い文章で要点をついた文が書けるが、多様な面からの観察力に欠け、具体性に乏しい。</li> <li>・聞く側の立場に立って、説明的な文を書くことができる。</li> <li>・「もっとも～」「～するほど」という難しい表現が正しく使える。</li> </ul>		
イ 形式面の実態調査			
①文体	(常体)		
②文法	<ul style="list-style-type: none"> <li>・主語、述語がはっきりしている。助詞の誤用はない。</li> <li>・接続詞はあまり使用していない。(その次は、～けど、これで)</li> </ul>		
③表記	<ul style="list-style-type: none"> <li>・かな(207字) かたかな(3字) 漢字(21字)</li> <li>・習った漢字は正しく使える。</li> <li>・区切り符号「、」の使用が少ない。</li> </ul>		
ウ 計量面の実態調査			
①文字量	(231字) -ア		
②文 数	文数(11) -イ 平均文字数(21-ア/イ)		

### (2) 評価の観点・規準

全教育活動における児童の学習状況や指導の効果について適切な資料が得られるように、指導過程における目標を段階的かつ多面的にとらえ、具体的に観点を設定する必要がある。



その際、児童一人一人がもつよさや可能性を把握する個人内評価の視点や児童が主体的に学習活動を改善できるような評価について特に配慮する必要がある。

また、自己評価にあたっては、自ら学習の過程を振り返り、新たな目標や課題をもって学習が進められるような視点に配慮する必要がある。

### (3) 評価方法（例）

#### ① 発問による評価

直接指導の授業中に、問題の理解や学習の進め方、学習内容などが十分理解されているかどうかを具体的な質問によって確認する方法である。特に、課題をつかむ段階での評価として有効である。

#### ② 観察法による評価

授業のそれぞれの過程において、児童の活動状況を観察し、行動や表情を評価の資料とする方法である。全員を観察するだけでなく、特定の児童を観察したり、間接指導中に観察したりする方法が考えられる。

#### ③ 作品による評価

ノートや学習カードなど学習の成果として残された作品を分析的に活用する方法で、学習後の自己評価や相互評価としても活用できる。しかし、担任の主観やマンネリ化に陥りやすいため、評価の観点を明確にして学級担任以外の教師からも評価してもらうと効果的である。

#### ④ ペーパーテスト等による評価

ペーパーテストは、児童の目標に対しての知識・理解や技能等の到達度を把握する上で効果的である。また、学力テスト等の標準化されたテストは、実施後に分析を十分に行うことで、児童の実態を客観的に把握でき、以後の指導に役立てることができる。

#### ⑤ 自己評価

学習の結果だけではなく、学習の過程についても視点を明らかにして評価させることは効果的である。特に学習の進め方についての評価は、学び方を定着させる上からも、意義深い。また、自己評価を取り入れることによって学習をより主体的に行おうとする意識を高めることができる。

#### ⑥ 相互評価

お互いのよさを認め合い、客観性を培う上からも大変有効な評価方法である。しかし、小集団のため日頃の固定的な評価に陥らないよう、教師も相互評価に参加するなどの配慮をする必要がある。また、異学年で行う場合は、児童の発達の段階を考慮して視点を決める必要がある。

### (4) 評価の生かし方

少人数であるという特性を生かし、個々の児童をきめ細かく評価し、指導に生かしていけるようその都度適切に処理しておくことが大切である。個人記録のような累積的記録は、日頃から実態の把握に努め、定期的に記録するようにする。また、評価を定量的にだけとらえるのではなく、児童の能力を多面的にとらえ、質的な変化を指導に生かすようにする必要がある。評価の結果が指導計画や指導方法のどこに関連があるかを分析し、具体的で個に応じた手だてを講じる必要がある。